

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00408

研究課題名（和文）「文学性」の概念をめぐって 批評理論の思想史

研究課題名（英文）On the Idea of "Literariness": Intellectual History of Literary Criticism

研究代表者

大河内 昌（Okochi, Sho）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60194114

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀における文学批評理論の展開をひとつの「思想史」として記述・分析するところみである。焦点となるのは「文学性」の概念である。本研究は「文学性」の概念がどのように形成され、最終的に消滅していったのかという、その軌跡をたどることをこころみる。文学テキストと他の文書を区別する基準こそ「文学性」である。20世紀の文学理論は何をもって「文学性」としてきたのだろうか？本研究は19世紀末の唯美主義から20世紀末の脱構築批評までの批評理論を特徴づけた「文学性」の概念を分析し、文学研究の方法論としての批評理論が成し遂げたことと、成し遂げようとして叶わなかったことを整理することをこころみた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀の理論的文学研究は、構造主義言語学、マルクス主義、精神分析、ミシェル・フーコーの言説理論などを大胆に取り入れ、学際的な学問分野として発展してきた。しかし、そうした成果にもかかわらず、近年、文学研究の衰退が言われている。本申請者はそうした事態を憂慮しているが、文学研究の今後の可能性を切り拓くためには文学研究の方法論としての批評理論が成し遂げたことと、成し遂げようとして叶わなかったことを整理する必要がある。本研究は、20世紀における批評理論を包括的に再評価することによって、21世紀における文学研究の未来を描くことを目指したという点で、大きな学術的・社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to describe the development of 20th century literary theory as a total history of thought, focusing on the idea of "literariness." This study traces the trajectory of the rise and fall of this idea. In modernized countries in the early 20th century, literary study was established as an academic and educational disciple of universities. It became necessary there to define literature as distinguished from other disciplines, such as sociology, psychology, or history. It is "literariness" that is introduced to distinguish literature from other kinds of discourses. But how did literary studies in the 20th century define the "literariness"? This study analyzes this idea, trying to define what modern literary theories from aestheticism to deconstruction achieved, and what they failed to achieve.

研究分野：人文学

キーワード：文学理論 唯美主義 脱構築批評 フォルマリズム イデオロギー 新批評 構造主義 美学

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者である大河内は、本研究を開始する以前には、18世紀イギリス文学・思想、ロマン主義文学の研究をおこなってきた。科学研究費助成金としては、これまで「感傷主義の射程」(基盤研究(C)、平成22~24年度)、「デイヴィッド・ヒュームと18世紀英文学」(基盤研究(C)、平成25~27年度)、基盤研究(C)「美学の可能性 美学イデオロギー批判を超えて」(平成28年度~令和元年度)の助成を受け、18~19世紀イギリスにおける文学、美学、政治経済学の関係を調査してきた。「文学性」というキーワードを軸に20世紀の批評理論をひとつの思想史として研究しようとする本研究は、これまでの18~19世紀イギリスにおける思想・文学の射程を現代まで押し広げさらに深化・発展させるものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、20世紀の文学理論が成し遂げたことと成し遂げることができなかったことを、「文学性」の探求という観点から整理することで、これからの文学研究のあり方に関する展望を切り開くことを目的とするものである。20世紀にはいると、近代化された国家の大学では、「文学研究」が教育と研究の制度として整備されていった。そこで必要となったのが、「文学」とは何かを定義することであった。教育・研究制度として文学を確立するためには、歴史学や心理学や哲学といった隣接分野から文学を区別する必要があるためである。学問分野として自立するためには、研究対象と方法論をもつ必要があったのだ。文学と他の文書を区別する基準こそ「文学性」(literariness)である。20世紀の文学理論は何をもって「文学性」としてきたのだろうか？このことを跡づけ整理することによって、20世紀の文学研究が何を目的としてきたのか？その目的はどの程度まで実現できたのか？現在、文学研究が衰退しているとしたら何か原因なのか？今後の文学研究の方向性をどう定めたらいいのか？といった諸問題に答えることができる。

以上のような研究目的を達成するために、本研究は20世紀後半の主要な批評理論のいくつかに焦点を当て、それらが「文学性」もしくは「文学」をどのように定義しようとしたのかをたどった。本研究は思想史的なアプローチをとる。これまでも批評理論に関する研究は多く書かれているが、それはおもに批評理論を解説し、作品研究におけるその理論の有効性や弱点を説明するようなアプローチが多かった。だが、本研究は、ひとつの思想史として批評理論の歴史を記述する。ロシア・フォルマリズム、構造主義、脱構築批評がどういう手続きで文学性という概念を組み立てたのか、それぞれの理論の有効性と問題点は何だったのかを、それぞれの理論の内部に分け入ってあきらかにすることをこころみる。すぐれた理論家たちのテキストを精読し、彼らの思考の足跡をたどり、彼らが得た洞察や陥った死角を腑分けし整理することもおこなった。

本研究の中核的な問いは、なぜ文学研究が21世紀にはいって苦境に陥ったかという理由を、理論的に解明することであった。結論を先取りしていうなら、20世紀前半からくり返しこころみられた「文学性」の定義 文学研究の領域を確定すること は、最初から破綻を内包していたのである。文学批評がごく少数のエリートの嗜みである間は、「文学性」を定義することはとくに必要なかった。それは「しかるべき教養を積んだ特権的な教養人が直観的に判断するもの」ということで十分だった。文学批評は高尚ではあるが、例外的少数者が社会の片隅でおこなう行為だった。だが、大学教育が普及し、歴史学や哲学や社会学とならんで文学という学問分野が大学に置かれるとき、その研究対象と方法論を確定することが要請されるようになった。それがなければ、文学という学問分野の自律性を説明できないと考えられた。それを最初に本格的にこころみたのはアメリカ新批評とロシア・フォルマリズムである。近代的な批評理論の原初形態であるこの二つの批評(とくにロシア・フォルマリズム)が、「文学性」を定義するさいに、構造主義的な言語論を導入したことはまさに「症候的」なことであった。文学の言語を他の言語から理論的に区別するためには、ある種の言語学(一般的な言語理論)が必要となる。だが、言語学を導入して「文学性」を理論的に説明しようとする行為それ自体が、「文学性」の定義を不可能にし、ひいては文学という学問制度を危機に陥れるのである。本研究は、20世紀の文学理論の歴史が、言語モデルの導入によって文学の定義が不可能となる事態がくり返された歴史であることをあきらかにする。かつて、伝統的な文学研究に対する脅威と考えられた脱構築批評は、文学研究を守ろうとする完全に保守的なこころみであったこともあきらである。

### 3. 研究の方法

本研究は、20世紀の批評理論、とくに「文学性」の概念を中心に据えたロシア・フォルマリズムと脱構築批評の重要な文献を再読する。これらの理論が「文学」と「文学性」をどのように定義しようとしたのかということに焦点を当てながら、それらの思想史的な遺産を整理し、それらが21世紀に対して与えてくれる洞察を再評価し、きたるべき時代において、文学研究がどういったかたちで存在しうるかという問題を論じることをこころみた。本研究は、いくつかの主要な文学理論に焦点を当てながら、文学理論の変遷を思想史的に記述する。そのさい、各理論の特色を総論的・総花的に整理するのではなく、それぞれの理論を代表するいくつかのテキストをとりあげ、それらを徹底的に精読するという方法を採用する。そうした精読作業によって、概説的な

議論では見落とされてしまう各理論の洞察と死角を抉り出す。複雑な文学テクストを分析しようとする批評理論はしばしば複雑な修辭的構造をもっており、テクストの表層的なメッセージを裏切るような「二次的メッセージ」あるいは「潜在的な陳述」をふくんでいる。精緻なイデオロギーを構築するテクストは、それゆえ、「精読」を要求する。本書がこころみるのは、イデオロギー的なテクストを精読することによって、それらのテクストがもつ表面的な主張だけでなく、それらの修辭的な構造が発する潜在的なメッセージを掘り起こすことである。なぜなら、表層的な陳述と潜在的な陳述のあいだの葛藤と矛盾の分析をとおしてのみ、テクストの中に痕跡として存在している歴史的・政治的な問題があきらかになるからである。テクストが内包する異なったレベルのメッセージが生み出す葛藤から、われわれは言語テクストの力学がもつ複雑な襞に分け入ることが可能となる。そうした力学の中に、物質的な政治と歴史の力の痕跡を見出すことができるのである。こうした精読の技法は、近年の理論的文学研究によって一層研ぎすまされたものになっている。本研究は、文学的な精読の技法によって批評理論を思想史として読みなおすこころみであり、批評理論のテクストそのものに精読の技法を適用することによって、批評理論の可能性をとらえようとするこころみである。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究の第一段階では、ロシア・フォルマリズムとポール・ド・マンの「文学性」の理論の共通性を分析した。ロシア・フォルマリズムは同時代に出現した構造主義の言語論との関係が指摘されることが多い。しかし、構造主義は多様な表層の下にある単一の構造を探り当てようとする思想である。だが、ロシア・フォルマリズムの中心概念はシクロフスキーの言う「異化」であり、異化の効果としての「文学性」は言語の表層(パロール)の次元で生まれる。ド・マンの理論も「文学性」を言語の表層に見つける点でロシア・フォルマリズムの理論に近い。ド・マンによれば、文学性とは言語と意味との乖離を積極的に演じるテクストである。従来の文学研究は解釈学的なものであれ実証主義的なものであれミメシス論的な前提を暗黙の裡にもっている。そうした前提を解体するものが「文学性」なのであり、それをあらわにする読解技法が「修辭的読解」なのである。修辭的な読みは言語と現象世界の必然的なつながりという幻想を解体し、言語テクストの自律性を露わにする。つまり、文学性とは、言語と現実とは必然的な関係をもっていないことを自ら暴露するような言語の性質なのである。ポスト・コロニアル批評、新歴史主義、文化研究といった最近の方法論は、ド・マン的な文学批評とはまったくちがって、個々のパロールではなくむしろ言説の深層構造の解明に力を注ぐタイプの研究となっている。だが、文学研究が21世紀に生き延びるためには、言語の表層にこだわる「修辭的読解」の有効性を追求することが重要であると思われる。

(2) 本研究の第二段階は、ポール・ド・マンが提唱した「修辭的読解」の有効性と限界を確認するために、それをじっさいのテクストに適用することであった。まず、ド・マンのカント論である「カントにおける現象性と物質性」を取り上げ、その議論を跡づけた。ド・マンの論点は、一般に主観的崇高を提唱したとされるカントの『判断力批判』の中心には、あらゆる主観性と現象性を排除する「唯物論」が存在しているということであった。こうしたド・マンの論点をイギリス・ロマン主義の詩人ワーズワスの詩(具体的には「ウェストミンスター橋上で詠める」と題されたソネット)に適用することで、カントと同様にこれまで主観的な崇高と結びつけられ理解されてきたワーズワスの詩的言語の中に、ある種の唯物論的ヴィジョンが存在することを証明した。

(3) 本研究の第三段階は文学の言語様式を他の言説様式から切り離す考え方の源泉として、19世紀イギリス世紀末の唯美主義美学に着目した。具体的な対象としては、オスカー・ワイルドの評論集『インテンションズ』の中の「嘘の衰退」と「芸術家としての批評家」を分析の対象とした。唯美主義とは「芸術のための芸術」「情緒のための情緒」というスローガンのもとで現実から退却することだが、文学と批評を「究極の芸術」とするワイルドは、現実世界と無縁な言語空間で、世俗的な倫理と無縁な新しい神話とその美学を生産することで、閉じてはいるが洗練を極めた完成された虚構世界という思想をつくり上げたのである。逆説に満ちたワイルドの評論は論理的証明によって議論を構築することを旨とする20世紀以降の学術的な文学批評とは共通性をもたないものに見える。だが、ワイルドは「文学は政治や経済の言語には支配されない自律した領域である」という思想を構築することによって、20世紀に展開した「文学性」の理論を先取りしていたのである。

(4) 本研究の最終段階は、「修辭的読解」の技法を文学の狭い定義を超えて哲学的なテクストに適用したド・マンにならって、18世紀イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒュームの『自然宗教をめぐる対話』の修辭的読解をこころみた。この『対話』という作品をめぐるのは、そこから無神論の思想を読み取ろうとする解釈と有神論の擁護を読み取ろうとする解釈という正反対の解釈が存在している。だが、本研究は『対話』が文字通り対話篇のかたちで書かれていることに着目した。つまり、この対話篇の目的は、彼のエッセイと同様、哲学のもつ批判力を宗教の問題に適用することで、読書人たちを楽しませかつ啓蒙することだったのである。ヒュームは『対話』という虚構形式を用いることで、宗教を文学的な議論　つまり、一般の読書人が共有できる議論　の主題にしようとしたのだ。ヒュームは『対話』をとおして、世俗化が進展する市民社会の中で宗教がどのような役割を果たすべきか、政治や道徳との関係の中でどのようなかたちで論じられるべきかという問題に対して、ひとつの回答を示そうとしたのである。本研究は、「修

辞学的読解」を用いることによって、従来は哲学のテキストに分類されていたテキストに対しても、文学研究の技法を適用できることを示した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 36
2. 論文標題 記憶と共同体 「マイケル」とワーズワスの墓碑銘的想像力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 試論	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 13
2. 論文標題 カント、ワーズワス、ド・マン 物質的崇高を再考する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北英文学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 71
2. 論文標題 唯美主義と文学の自律性 オスカー・ワイルドの『インテンションズ』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 103-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 0
2. 論文標題 「文学性」の概念をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 脱領域・脱構築・脱半球 二一世紀人文学のために、巽孝之監修（小鳥遊書房）	6. 最初と最後の頁 313-330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大河内昌
2. 発表標題 ワーズワスの自分語りと「内面性」の誕生
3. 学会等名 日本英文学会第93回全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------